

有島武郎とキリスト教

-内村鑑三『求安録』とのかかわり-

尹一*

目次

- I. 序論
- II. 本論
 - 1. 「求安録」との出会い
 - 2. 罪の問題の深化
 - 3. 「霊肉二元対立」の問題
 - 4. 二元対立からの観照的姿勢
- III. 結論

I. 序論

有島武郎が明治三十四年三月札幌獨立教會へ入會し、明治四十三年五月同教會を脱會するまでの時間はほぼ十年間にわたった。教會員としての時間をふくめ、彼がキリスト教と直接かかわっていたのは親友の森本厚吉とともに、定山溪で神の存在を知った明治三十一年までさかのぼることができる(詳細は後述する)。有島とキリスト教とのかかわりについては、すでに多くの論者によって指摘されており¹⁾、有島みずからも『リビングストン伝』の第四版の序(警醒社

* 建陽大學校 講師

- 1) 有島とキリスト教の関係のなかで、入信前後の問題について論じた主なものは次のようなものがあった。
荒正人「有島武郎—聖書と性欲」(『近代作家』昭和23年3月)
小泉一郎「有島武郎論—特に彼におけるキリスト教の問題」(『東京女子大學附屬比較文化研究所紀要』第1巻第1号 昭和30年9月)
久山康編『近代日本とキリスト教<大正・昭和編>』(キリスト教學徒兄弟団、昭和31年11月)
笹淵友一「キリスト教と文學」(昭和32年2月)
宮野光男「有島武郎研究—自然觀にみるキリスト教受容と定着化の考察—」(『國語教育研究』昭和38年12月)
上杉省和「有島武郎のきりすときょう入信とその周辺—新資料による覚え書き—」(『國語國文研究』昭和40年9月)
佐古純一郎『キリスト教と文學』(新教出版社、昭和40年11月)

書店、大正八年六月)や日記などを通じて、その経緯を明かしていた。韓国では鄭旭盛「有島武郎のキリスト教入信の問題」(『日本文化學報』第八輯)が入信における問題の詳細を指摘し、その先驅的役割を果たしており、日韓において有島とキリスト教入信の問題は知り尽くされているような気がする。ただし、入信の時期をめぐる問題や信仰態度に対する意見は分かれており、そのなかでも信仰者としての有島の信仰態度は議論の余地を残している²⁾。

本稿ではキリスト教入信以前の有島がキリスト教に興味を持ち、それを受け入れていく過程に注目したい。

ところで、前掲の鄭旭盛はキリスト教入信に新渡戸稻造、内村鑑三、森本の影響があったことを認めながらも、彼らとの関係がキリスト教入信の直接的影響を与えとは言わない。その直接的影響として出していることは「<眞面目>たる自分に向かう『修身』上の一種の道具」、または「規範的精神」のことであった。そして、續いて注目したのは、次のような明治三十二年二月二十一日付の有島の日記であった。

人は至つて無能なり一偽善さへなす能はざる程一されども彼には一の大なる力の与へらるゝあり。(中略)さらば人とは如何なるものぞ。人は死に面せざる迄は全く悪魔の支配を被り居るものなり。彼等がある行爲をなし善行と見ゆるものをなすは彼がなすに非ずして悪魔がなさしむるなり。

氏がこの日記を通して語っていたのは「『修身』の道を通して實現しようとしたことの完全なる敗北」であって、それは「『人』に對する絶對的な信賴の代わりに『神』と『悪魔』という『人』を支配する新たな存在の認識の發見に変わっている」ということであった。要するに人間不信に陥っていた有島が新たな道として選んだのは絶對者であるキリスト教の神であったことであろう。自分を罪人として認める自己否定よりキリスト教の信仰が始まることを考えれば、もっともらしい筋である。

笹淵友一『明治大正文學の分析』(明治書院、昭和45年11月)

川鎮郎「有島武郎とキリスト教」<瀬沼茂樹・本田秋五編『有島武郎研究』>(右文書院、昭和47年11月)

宮本光男『有島武郎の文學』(櫻楓社、昭和49年6月)

北原照代「有島武郎のキリスト教信仰とその行方」(『北九州大學國語國文學』第8巻 平成7年3月)

米倉充「有島武郎とキリスト教」(『關西學院大・キリスト教研究』 昭和56年3月)

有島武郎研究會編『有島武郎とキリスト教』(右文書院、平成7年8月)

高橋章「有島武郎とキリスト教」(『國際關係研究』21—4 平成13年2月)

富岡幸一郎「内村鑑三と有島武郎—キリスト教信仰と文學の狭間—」(『國文學』48—7 平成15年6月)

2) 論者は「有島武郎のイエス論」(『日語教育』韓國日本語教育學會第十七輯 平成十三年十二月)を通して、従來の研究で論じている有島のキリスト教に對する信仰態度、そのなかでも信仰成立の問題として重要である贖罪論について、有島はキリストの贖罪の「其事實ヲ否ム事ガ出來マセン」と明確に告白しており、せめて明治三十六年の日記を書いた時の有島において、キリスト教信仰の成立條件としてもっとも大切な問題である贖罪觀があったことを否定することはできないだろう。(538-539頁)

がしかし、何故人間不信に陥っていたのかという肝心なところでは「森本との所謂男色事件」と言及することに止まり、不満を感じざるを得ない。キリスト教入信の決定的契機を見つけることであれば、自己否定的態度を取るまでの過程を探る作業は欠かせないものであって、単に従来言われていた「所謂男色事件」では満足することができないはずである。つまり、氏の論は自己否定によって「偽善者」である自分自身を発見し、キリスト教へ入信する有島を捉えたものであり、本稿はキリスト教へ入信する以前、自己否定に陥っていく有島の姿を中心的に捉えようとするものである。

ところで、入信というキリスト教との直接的なかわりを持たなかった志賀直哉や武者小路實篤などと違って、有島は一時期内村鑑三の後継者としてまで噂されるほどのキリスト者であった³⁾。

ところが、

何と云つても私に強く感動させるものは大きな芸術です。然し聖書の内容は畢竟凡ての芸術以上に私を動かします。芸術と宗教とを併説する私の態度が間違つて居るのか、聖書を一箇の芸術とのみ見得ない私が間違つて居るのか私は知りません。

「『聖書』の權威」（『新潮』第25巻第4号 大正5年10月）、『全集』第7巻、350頁

と、聖書は「一箇の芸術とのみ見得ない」態度を取る轉換を招いた原因を明らかにするためにも、自己否定の中身をより徹底的に追究すべきである。

本稿では、特に有島のキリスト教師であった内村鑑三の『求安録』⁴⁾に焦点をあわせ、以上のような問題に取り組んでみたい。それは笹淵友一が「彼のキリスト教は内村のキリスト教であった⁵⁾」と指摘するほど、内村による影響は大きく、『求安録』がキリスト教入信へ、少なからずかかわっていたと思われる⁶⁾。現時点で、あくまで推論にすぎないが、『求安録』が彼の入信にかかわっていたことになると、キリスト教離脱にも何らかの形でかかわっていたはずである。

3) 内村は「背教者としての有島武郎氏」（『夕刊万朝報』大正12年7月19日～21日）のなかで、「人も私も彼が後を嗣いで、獨立の基督教を伝ふる者と成るのではないかと思ふ程であつた」と、熱心なキリスト教者であった有島を語った。

4) 内村鑑三『求安録』（警醒社書店、明治26年8月）

5) 注1の『明治大正文學の分析』、683頁。

6) 有島のキリスト教入信への動機については、内村との関係、親友の森本との関係、札幌農學校時代の恩師であった新渡戸稻造の神秘主義的クェーカー主義派の影響（注1の笹淵『明治大正文學の分析』に詳しい）などが指摘されている。本稿では、とりわけ内村の『求安録』との関係を中心に論じてみたい。

Ⅱ. 本論

1. 「求安録」との出会い

明治三十一年九月三日の日記は7)、青年期の有島における宗教への関心が絶えなく、宗教書物への興味を引いていたことを示すものである。

此夜西本願寺別院ニ島地黙雷師ヲ訪フ。我ハ若シ師ガ清閑アラバ少シク仏教ニ付テ聞ク所アラント樂ミツツ行キヌ。……我ハ仏教ノ僧俗ニハ頼ルマヅトハ覺悟シナガラ、仏教ノ惡シキ爲メ此如キ信者ヲ生スルニハ非ズヤトノ疑問ニ閉サレントシテ痛ク今迄デノ忍耐ヲ失望セントスルナリ。嗚呼仏クハ果シテ信スルニ足ラザルノ教ナル可キカ。

上の引用によれば、彼の疑問は「釋迦ノ伝ニ何者アルカ」であったというが、それに對する「師」は彼を満足させることが出来なかったようである。

ところが、その三ヶ月後の明治三十一年十二月二十九日、次の日記8)のように、ようやくキリスト教の書物に「眞理ヲ求ム」ことができ、キリスト教入信への決定的な引き金になったと見られる。

朝二人ニテ“立志之礎”ヲ讀ミ、午後ヨリ散歩シ、入浴シテ又夕刻ヨリ“求安録”ヲ讀ム。夜ニ至リテ興益益多く而カモ心ヲ刺戟セラルル事實ニ一ニシテ足ラズ。戰々トシテ身ノ震フヲ覺エズ。嗚呼余何ニ足ラザル所アリテカクハ眞理を求ムル事渴スルガ如キ事能ハザルカ。……此夜黙想ノ時初メテ森本君ノ前ニ（否人ノ前ニ）余カ祈禱ヲ發聲シタリ。余ハ求安録ニ非常ナル感動ヲ受ケタレバナリ。願クハ此感動ニシテ永ク余ガ心中ヲ支配セヨ。

有島が「非常ナル感動ヲ受ケタ」『求安録』は、内村の「聖書のことばを基本に、自伝的体験的に表明された、著者自身の信仰告白であった」という9)。前の日記（明治三十一年九月三日付）のなかで、「西本願寺別院」を訪問した目的が「釋迦の伝ニ何者アルカヲ」聞く爲であったことを考えれば、彼が求めていたものは宗教者における「自伝的体験的」伝記類であったと推測される。それが内村の「自伝的体験的に表明された」「信仰告白」書の『求安録』に「感動」を受けた要因の一つであったのである。

ところで、キリスト教に興味を持ったものの、キリスト教入信に至っていなかった有島に

7) 「觀想録」第1巻、『有島武郎全集』(以下『全集』と略す)第10巻、107頁。

8) 「觀想録」第2巻、『全集』第10巻、110頁。

9) 鈴木俊郎編「解題」、『内村鑑三全集』第2巻、504頁。

とって「此夜黙想ノ時初メテ森本君ノ前ニ（否人ノ前ニ）余ガ祈禱ヲ發聲シタリ」という態度は、どのように理解すべきであろうか。求めていた眞理を得た後、祈りの対象が何であったのか。それはキリスト教の書物である『立志之礎』と『求安録』を讀んだあとであったことを考えれば、キリスト教の神であったと言えよう。

遠藤周作はキリスト教信仰生活において重要な三つのものを、「礼拝に出席する」、「聖書を讀む」、「祈りをする」と提示していた¹⁰⁾。その内、お祈りについては次のように語っていた。

どの宗教にも祈り（あるいは、それに類するもの）があるが、キリスト教では、とくに大切にしている。教會に集まって祈ったり、個人の生活の中で祈ったりする。祈りは神との對話であって、願いをささげるのであるが、何よりも神の意志を聞こうとする信仰的な深い経験である。神を信じて生きようとする信仰生活には絶対に欠かせないのである。一日を祈りではじめ、祈りで終える。食事の前には感謝の祈りをし、信者が集まったり、訪問をすればともに祈って、信仰の交わりを深める。

祈りを「神との對話」、「神の意志を聞こうとする信仰的な深い経験」と言っているが、キリスト教に入信前の青年有島に「信仰的な深い経験」は期待できないとしても、罪の問題に悩んでいた彼が聲を出してまで祈った対象がキリスト教の神であったことに異議はあるまい。罪から自由になる「贖罪術」の「眞理」を得、体が震えられる感動を覺えた彼が、歡喜に満ちたあげく聲を出して祈る姿は罪の問題について「神との對話」を求めたことにはかならない。そうすると、この出來事にキリスト教入信を認めることはできなくても、入信への動機となったことに間違いない。

一方、『求安録』の冒頭は「人は罪を犯すべからざるものにして罪を犯すものなり」と始まっており、人間における「罪」の意識が「全編の主題を爲している¹¹⁾」という。この頃の有島は「自分の性欲と信仰との間に終始苦んだ¹²⁾」と告白しており、また一緒に「感動ヲ受ケタ」親友森本も「罪といふ觀念に最も苦んでいた¹³⁾」ということから見られるように、彼等における「非常ナル感動」へ『求安録』の「脱罪術」が少なくない影響を与えていたのであろう。

ところで、内村が語る「脱罪術」としては「其一 リバイバル」、「其二 學問」、「其三 自然の研究」、「其四 慈善事業」、「其五 神學の研究并伝道」があった。その目次をみれば¹⁴⁾、『求安

10) 遠藤周作編著『キリスト教の事典』（三省堂、1990年6月）、30-31頁。

11) 注4と同じ。

12) 『リビングストーン伝』の序、第四版（警醒社書店、大正8年6月）、『全集』第7巻、363頁。

13) 注12と同じ、366頁。

14) 目次は次のとおりである。

求安録目次

上の部

録』が罪からの解放についてどれほど重点をおいていたのかがわかる。

そして、「自序に代ふ」に次の聖書を引用していたことは、内村の「脱罪」と「亡罪」の自伝的体験を語りながら、自分は未だに罪から自由ではなかったことをあらわしたものであった。

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけではありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

(ヒイリピの信徒への手紙第3章12節-14節)

また、「其五神學の研究并に伝道」のなかに「理想的伝道師」の一人としてあげられている人が『リビングストーン』であった為であろうか、有島と森本は、二人の共著で明治三十四年三月、『リビングストーン伝』を警醒社書店から出していた。すなわち、「リビングストーンを通過して私自身の信仰を世に伝へたいと云ふ動機も小さなものではなかつた」¹⁵⁾と語っていたように、二人における「脱罪術」の一つとして「伝道」を念頭に置いた『リビングストーン伝』の著述があったのではないだろうか。無論、著述の際にして彼等の先輩であった内村に「少なからざる鼓舞と助力を」¹⁶⁾「もらったのは言うまでもなかつた。

そして『求安録』は、「人類がその造主を離れてより彼の靈肉ともに平衡を失ひ、靈は肉を支

悲嘆

内心の分離

脱罪術 其の一 リバイバル

脱罪術 其の二 學問

脱罪術 其の三 自然の研究

脱罪術 其の四 慈善事業

脱罪術 其の五 神學の研究并伝道

亡罪術 「ホーム」

亡罪術 其の二 主樂説

亡罪術 其の三 樂天主義

下の部

罪の原理

喜の音

信仰の解

樂園の回復

贖罪の哲理

最終問題

15) 『リビングストーン伝』の序、第五版（警醒社書店、大正8年10月）、『全集』第7巻、394頁。

16) 「例言」『リビングストーン伝』（明治34年3月、警醒社書店）

配し得ず、肉は靈に順ひ得ず」¹⁷⁾と「靈肉二元對立」を取り上げ、問題の解決方法はイエス・キリストへの「信仰に依てのみ義とせらるる」ことしかないと言ったのである。

2. 罪の問題の深化

彼等は『求安録』のとおり、「罪といふ觀念」から自由になるはずであったが、必ずしもそういうことにはならなかったようである。

次の日記¹⁸⁾に見られることは『求安録』によって「非常ナル感動を受ケタ」その夜の出來事であった。

卅日。晴天。昨夜ハ余ト森本君トニ取りテ實ニ非常ナル時ナリキ。余ハ其時ノ出來事ヲ日記ニ載スルモ厭フナリ。嗚呼若シ余ニシテ平生毅然タル丈夫ノ心アラシメバ森本君ヲシテカカル舉動ニ出デシムル事ハ夢之レナカリシナリ。畢竟余ガ鍛鍊ノ至ラザル罪遂ニ累ヲ森本君ニマデ及サシメヌ。余ハ秀麗貧夫モ其心ヲ正フスベキ此定山溪ノ山水ニ對シテ此事アリシヲ痛ク恥ツルモノナリ。余ハ再ヒ山水ヲ觀望スルノ勇氣ナキニ至リヌ。涙ハ余ガ此日終日ノ同伴ナリキ。悲シキモノハ惡ニ誘ハレ易キ人ノ心ナルカナ。……夢に過ぎ夢に迎へて一年の暮るるは早きものにそありけるト。嗚呼眞ニ此ノ如シ。

「身ノ震フヲ覺エ」るほどの「非常ナル感動」を受け、初めて聲をあげて祈禱したその夜、「余ト森本君トニ取りテ實ニ非常ナル時」は何を意味するものであろうか。『全集』の「年譜」では、冒頭でも言及したように「男色を経験」¹⁹⁾したと記していた。

また、後年の有島自らも定山溪での一連の出來事について「その時私は始めて宗教的有頂天とも云ふべきものに捕へられた。その有頂天が呼び起す恐るべく緊迫した性欲の發作も亦た」と告白しており、「非常ナル時」が森本との同性愛経験であったことに異議はあるまい。

つまり、「宗教的有頂天」と「性欲の發作」を一晩の間、相次いで経験した有島における「靈」と「肉」の對立は、一層烈しくなったのであろう。『求安録』のなかから「降れば良心の責むるあり、登るに肉欲の妨ぐるあり……一個の我は他の我と常に戦ひつゝあるものなり、誠に實に此一生は戦争の一世なり」²⁰⁾と先輩内村における靈と肉の對立と、その「脱罪術」をみて「感動」していた有島がその直後犯した「罪」（前掲載、三十日付日記）は「涙ハ余ガ此日終日ノ同伴」するほど自虐的になったことは十分予測できる。罪からの解放を味わった昨夜の一瞬の「非常ナル感動」は朝になって「夢に過ぎ夢に迎へ」ることにならざるを得なかったのである。

17) 注4と同じ、191頁。

18) 注8と同じ、110頁。

19) 109頁。

20) 注4と同じ、137頁。

要するに『求安録』によって得られたつかの間の罪からの自由が、今度は『求安録』によって、罪が深化してしまうというアイロニーを生んでいたのである。ただし、そこには内村自身も「既に完全な者となっているわけではありません。何とかして捕らえようと努めているのです」と、常に罪を犯さざるを得ない、どうしようもない人間である告白に目を向けていなかったであろう。

3. 「靈肉二元對立」の問題

「非常ナル時」の次の日（明治31年12月31日）の有島は、「余ガ仏教ノ研究中徐々トシテ余ガ胸臆ノ一方ヨリ侵入シ來レリ基督教ノ教理ハ、余ヲシテ暗中更ラニ暗ヲ加ヘシメ、模索百番シテ尙光明ヲ仰ク能ハザルニ至ラシメタリ」²¹⁾と、彼における「罪」の意識は「基督教ノ教理」によって、益々深くなりつつあった。

そして、その「罪」は「余ハ昨夜又大ナル過失ニ陥リヌ。余ノ兄弟ガ毎夜ノ如ク或ル好シカラザル情ニ狩ラルルヲ見テ余ハ屢屢之レニ忠告シテ大ニ制限スル所アリタリ」²²⁾（明治32年1月4日）と「毎夜」にわたって續いていたようである。

結局、「靈肉二元對立」の問題などの「罪」意識に悩まされていた青年期の有島において、『求安録』にみられる「感動」はつかの間の「眞理」であって、「毎夜」の肉体的「大ナル過失」は、彼を更なる靈と肉の對立へ追い込んだのではないだろうか。しかも、その頃「侵入シ來レリ基督教ノ教理」が、彼を一層苦しめたことは言うまでもない。

そして、次のように「靈肉」の「二元對立」の問題はその後、彼を離れることはなかったのである。

私の心の中では聖書と性欲とが激しい鬭争をしました。芸術的の衝動は性欲に加担し、道義的の衝動は聖書に加担しました。私の熱情はその間をどう調和すべきかを知りませんでした。

「『聖書』の權威」(349頁)

私は自分が信仰を得たと思つてゐた時でも、實際は信仰を得てゐなかつた故であらう、常に常に肉の要求に打ち負けてゐたと云ふ事を告白せねばならぬ。實際に婦人を犯さなかつた私も、心の中では常に婦人を犯してゐた。而してこの内部の葛藤に苦しめられ通した。

「『リビングストン伝』の序」第四版(378頁)

無論、青年期における「靈肉二元對立」の問題は有島一人に限られる問題ではないだろう。例えば、同じく「『白樺』派」の武者小路が「肉欲の馬鹿げてゐる事と、誠の力の強い事は、此

21) 注8と同じ、111頁。

22) 注8と同じ、117頁。

頃一層感じる。しかも肉欲の奴となること、日に幾回なることを知らず、バイブルを讀んでゐるうち、ト翁の著を讀んでゐるうちにも、時々変な考へが起る。罪深き者よ²³⁾と、同じく青年期の共通する悩みとして「性欲」の問題があつたことを語っていたのである。

また、有島の性格について語つた、次のような武者小路の文章²⁴⁾に見られる「罪」の意識に對しての彼の執着心が、終始「靈肉二元對立」の問題を負わせていたと思われる。

武郎さんはものを一図に思ひ込む質らしい。他人に對する好惡も、又耶蘇教に對する態度などでも、一方に思ひ込むと他方を忘れる傾きがあつたやうに思ふ。耶蘇教からはなれた元因の話はよく聞いたが、一人の氣狂ひが罪を恐れすぎたのを見たのが元因だつたらしい。つまり牧師の説教におどかされて氣狂ひになつた男を見て、あまりその男の悲惨に同情した結果、耶蘇教に疑ひをはさみ、それからインガリールの思想の影響をうけたらしい。話で聞いただけではいいことは知らないが、僕の聞いた所では米國の宗教界に愛想をつかすだけですみさうに思ふのに、耶蘇から離れたやうに思ふ。

有島の離教に、上の引用のエピソードに見られる「罪」の意識への強い執着があつたということとは十分考えられるものであろう。

前の日記（明治三十一年十二月三十一日付）のなかで、キリスト教入信前の「余が仏教ノ研究中徐々トシテ余が胸臆ノ一方ヨリ侵入シ來レリ基督教ノ教理」が、その後森本との肉体的「罪」の意識と結ばれたことはすでに触れたとおりであつて、「靈肉二元對立」の問題が「姦淫してはならない」というキリスト教の教理とかかわり、それを離教の原因の一つとして考えることも可能である。

有島と武者小路が持つた異質感は、先ほど言及したとおり、性欲に對する罪の意識がそのままキリスト教の禁欲主義に結びついたのである大きな原因であつたと思われる。つまり、彼のキリスト教が、神と惡魔、救濟と墮落というような教義上の問題より「靈肉二元對立」に重点が置かれていたことも無理ではなかつたかもしれない。

したがって青年期の有島が抱えていた「靈肉二元對立」からの脱皮の試みはキリスト教離脱に繋がっており、その後、明治四十四年の「或る女のグリムプス」²⁵⁾の早月田鶴子を通して行つた反キリスト教倫理的「性的解放」は、「靈肉二元對立」を突破しようとした有島における試みの一つであつたのではないだろうか。

結局、『求安錄』によって深化された罪に對する意識が彼を「靈肉二元對立」の問題に落と

23) 「一九〇六年の日記」『彼の青年時代』（叢文閣、大正11年2月）、『全集』第1巻、226頁。

24) 「武郎さんについて」（『婦人公論』第8巻9号 大正12年9月）、『全集』第7巻、524頁

25) 「或る女のグリムプス」とも表記する。初出は明治44年1月發行の「白樺」第2巻第1号から大正2年3月發行の「白樺」第4巻第3号まで、16回にわたつて連載された。後に『有島武郎著作集第八輯或女』（叢文閣、大正8年3月）の「前編」になる。

し、キリスト教からの離脱まで追い込んだのである。

4. 二元對立からの觀照的姿勢

深刻な「靈肉二元對立」の問題に直面していた有島が、札幌獨立基督教會の脫會を宣言した明治四十三年五月、彼は「白樺」第一卷第二号に『二つの道』を掲載しており、その時点ではあらゆる「二元」の問題を始め、「キリスト教的」「靈肉二元對立」からも離れた、「二元對立」に對する觀照的姿勢がうかがわれる。

人の世の凡ての迷ひは此二つの道がさせる業である。人は一生の中に何時か此事に氣が付いて、驚いて其道を一つにすべき術を考へた。哲學者と云ふな、凡ての人が其事を考へたのだ。自ら得たとして他を笑つた喜劇も、己れの非を見出で、人の危きに泣く悲劇も、思へば世のあらゆる顯はれは、人が此一事を考へつめた結果に過ぎまい。

『全集』第7卷、5頁

ここで、「二つの道」が意味するものは、「人は色々な名によつて此二つの道と呼んで居る。アポロ、ディオニソスと呼んだ人もある。ヘレニズム、ヘブライズムと呼んだ人もある。Hard-headed, Tender-heartedと呼んだ人もある。靈、肉と呼んだ人もある」(前掲載、7頁)と書いたように、青年期の有島を悩ませていた「靈肉二元」を含む、あらゆる「二元對立」に關するものである。

教會脫會と同時に、キリスト教的「靈肉對立」の緊迫した思考から多少の余裕を持つようになった有島は、「此二つの道を行き盡してこそ充實した人生は味はれるのではないか。處が此二つの道に踏み跨つて、其終る處まで行き盡した人が果してあるだらうか」(6頁)と「二元對立」の一元化に對してやや懷疑的姿勢をみせていたのである。

すなわち、

人は相對界に彷徨する動物である。絶對の境界は失はれたる樂園である。人が一事を思ふ其瞬間にアンチセシスが起る。夫れでどうして二つの道を一條に歩いて行く事が出来ようぞ。

(前掲載、6頁)

という考えは、絶對者になれない人間における「二元對立」の問題からの一元化の不可能性を見出したものである。

また、「又其人が何處までも一つの道を進む時、其人は人でなくなる。釋迦は如來になられた。清姫は蛇になつた」(8頁)と語っているように、「二元」のなかで一つだけを志向することも

相対的人間にとっては、とうてい不可能であると直観したのである。つまり、「キリスト教的」「霊」と「肉」の戦いが一段落終わった後、「二つの道」に見られるような、あらゆる「二元対立」の問題に對して觀照的態度を取るようになったと思われる。

III. 結論

今まで触れてみたとおり、青年期の有島が持った罪の意識は『求安録』の「贖罪術」の「眞理」によって自由に解放されるはずであった。

しかし、ほぼ同時期に犯した肉体の罪は、かえって彼を罪の問題により深く陥れる結果となってしまうのである。その「霊肉二元対立」の問題はキリスト教に入信した後も、彼を離れることはなく、終始彼を悩ます障害物であった。文學者の道を歩もうとした彼は『二つの道』に見られるような二元対立のむ問題に觀照的姿勢をとると共に、キリスト教から離脱することになった。そして、それらの問題は彼の作品世界で生きていたのである。

先ほど言及したようにキリスト教から離脱した有島が²⁶⁾、

私は基督教會からは離れましたが基督を離れたとは思ひません。いくら離れようとしたつてその圏外に出るには基督は大き過ぎる事を感じてゐます。あなたの基督に對する信仰からいふと私は基督を離れ切つたものといふ事になるかも知れませんが私はそれは少し無理ではないかと思ふのです。

と、彼の生涯を通して作品のなかから「基督」の名が消えることはなかったのである。

つまり、有島の「イエス」が「キリスト教的」「二元対立」の問題から「自由」であったと推測できるだろう。すなわち、キリスト教離脱後の有島において、青年期体験していた禁欲主義的キリスト教は、もはやその意味を失っており、それに代わる「自己」は、性欲を超越したく調和>を目指すものであったのではないだろうか。

そして、その「自己の本能」を生きるものとして、彼によって「基督」が選ばれたのであって、竹崎宛の書簡に見られるような「基督」がキリスト教離脱後にも消えなかった理由はそこに起因するかもしれない。

26) 「或る女のグリムプス」とも表記する。初出は明治44年1月発行の「白樺」第2巻第1号から大正2年3月発行の「白樺」第4巻第3号まで、16回にわたつて連載された。後に『有島武郎著作集第八輯或女』（叢文閣、大正8年3月）の「前編」になる。

【参考文献】

- ・ 尹 一(2001)「有島武郎のイエス論」、『日語教育』第17輯、韓國日本語教育學會 538-539頁
- ・ 鄭旭盛(2000)「有島武郎のキリスト教入信の問題」、『日本文化學報』第8輯、韓國日本文化學會、2-3頁。
- ・ 有島武郎(1980)『有島武郎全集』第1巻、筑摩書房、226頁。
- ・ 有島武郎(1980)『有島武郎全集』第7巻、筑摩書房、363頁。
- ・ 有島武郎(1980)『有島武郎全集』第7巻、筑摩書房、350頁
- ・ 有島武郎(1981)『有島武郎全集』第10巻、筑摩書房、107頁
- ・ 有島武郎(1981)『有島武郎全集』第10巻、筑摩書房、110頁。
- ・ 上杉省和(1991)「有島武郎のきりすときょう入信とその周辺—新資料による覚え書き—」、有精堂、162-174頁。
- ・ 内村鑑三(1980)『内村鑑三全集』第2巻、岩波書店、135-137頁。
- ・ 内村鑑三(1983)『内村鑑三全集』第27巻、岩波書店、526-531頁。
- ・ 遠藤周作編著(1990)『キリスト教の事典』、三省堂、30-31頁
- ・ 岡本通雄(1963)「有島武郎の自殺とキリスト教—近代日本思想史の一断面—」、『論集』第9巻3号。
- ・ 笹淵友一(1970)『明治大正文學の分析』、明治書院、683頁。
- ・ 鈴木俊郎編「解題」(1980)『内村鑑三全集』第2巻、岩波書店、504頁。
- ・ 宮野光男(1991)「有島武郎研究—自然觀にみるキリスト教受容と定着化の考察—」、有精堂 154-161頁。
- ・ 武者小路實篤(1987)『武者小路實篤全集』第1巻、小學館、226頁。
- ・ 武者小路實篤(1988)『武者小路實篤全集』第7巻、小學館、524頁

要 旨

有島武郎が明治三十四年三月の札幌獨立教會へ入會し、明治四十三年五月同教會を脱會するまでの時間はほぼ十年間にわたった。教會員としての時間をふくめ、彼がキリスト教と直接かかわっていたのは明治三十一年までさかのぼることができる。本稿はキリスト教へ入信する以前、自己否定に陥っていく有島の姿を中心的に捉えようとするものであって、特に有島のキリスト教師であった内村鑑三の『救安録』に焦点をあわせ、『救安録』がキリスト教入信へかかわっていた思っている。ところで、罪の問題に悩んでいた有島は、『求安録』によって得られたつかの間の罪からの自由になったが、今度は『求安録』によって、罪が深化してしまうというアイロニーを生んでしまった。罪からの解放感を味わった瞬間襲ってきた罪の束縛が、彼を何倍も苦しめたのである。結局、『求安録』によって深化された罪に対する意識が彼を「靈肉二元對立」の問題に落とし、キリスト教からの離脱まで追い込んだのである。それは、「キリスト教的」「靈」と「肉」の戦いが一段落終わった後、『二つの道』に見られるような、あらゆる「二元對立」の問題に對して觀照的態度を取ることとほぼ同時期に起きたことである。しかし、彼の作品世界のなかで「イエス」の名が消えることはなかった。そこに、有島の「イエス」が「キリスト教的」「二元對立」の問題から「自由」であったと推測できる。すなわち、キリスト教離脱後の有島において、青年期体験していた禁欲主義的キリスト教は、もはやその意味を失っており、「自己の本能」を生きるものとして、彼によって「イエス」が選ばれたのであって、「イエス」がキリスト教離脱後にも消えなかった理由はそこに起因する。

キーワード：眞理、性欲、靈肉二元對立、イエス、脱罪、調和

투 고 : 2005. 5. 31

1차 심사 : 2005. 6. 11

2차 심사 : 2005. 7. 2

住 所 : (305-150) 대전시 유성구 반석동 양지마을1단지 102-2102호

電 話 : 010-6478-8291

e-mail : sanghine@hanmail.net